南九州における地下式横穴墓群の配置パターンについて

別府大学大学院　文学研究科　文化財学専攻
M1813001　池田　亘

地下式横穴墓は、南九州特有の古墳時代の墓制の一つで、分布は霧島火山群北縁の内陸部から前方後円墳が築造されている宮崎平野、大隅半島という限られた範囲で分布する。地下式横穴墓は２～３基、多くて 100 基以上で密集して見つかることが通常で、数基の地下式横穴墓が円形にグループを作る例や玄室主軸を前方後円墳や円墳の墳頂に向ける例が知られている。そこで、本研究においては地下式横穴墓群の配置についてパターンがあるという仮説を立てることにより、地下式横穴墓圏内における配置の違いやその背景を明らかにすることと、前方後円墳と地下式横穴墓との関係性について検討することを目的とした。

検討方法として、時期はⅠ～Ⅵ期に設定し、分布域を①加久藤盆地②西諸県地域③宮崎平野④都城盆地⑤志布志湾沿岸地域の５つに分け、面的に捉えることができる地下式横穴墓群を主に対象にして、時期を比定した。次に築造配置の仕方つまり配置パターンを適用させていく。仮定される配置パターンは主軸が一定方向を向く配置及び同心円状の配置である A パターン、明確な前方後円墳、円墳に付随する配置である B１パターン、さらに前方後円墳、円墳の周溝に付随する B2-1 パターン、周溝が付随する地下式横穴墓を B2-2 パターン、墳丘は見られず、求心状配置である B3 パターンに分類する。

検討の結果、大別した A・B パターンの性質について A パターンは山間部（①②地域）において多くみられ、主軸方向が台地の縁や川を向いており、集団墓の性格が強く現れる。B パターンは、前方後円墳や円墳付近に築造され、これらに従属する位置であることから階層性が示されている。これらの性質をふまえ、各時期の配置パターンの変遷を追った。A・B パターンがそれぞれ展開していく様子が見られ、配置パターンの展開範囲が A・B パターンを築造していた集団の影響範囲を示しているものと考えられる。以上より、大別した 2 つの配置パターンの違いの背景には A パターンを使用し、階層性を地表に示さない集団と B パターンを使用し、階層性を表す集団がいた可能性が考えられるのである。

また、築造集団が同一であるということは言えないが、前方後円墳と地下式横穴墓という墓制は共存するものであるということがいえるのである。